

# // 卷 頭 言 //

社会福祉法人日本ライトハウス  
養成部長 田邊 正明

日本ライトハウスは視覚障害に関する研究成果を公にするために「視覚障害研究」第1号を1973年12月に発刊した。最初の掲載論文は辻内弘氏の「職業訓練プログラムの開発－盲人コンピューター・プログラマー」、辻村泰男氏の「贖罪補遣－世界盲人百科事典追補」、黒住格氏の「ネパールにおける眼科医療の概略」であった。視覚障害研究は34号まで続き、1992年6月の35号から「視覚障害リハビリテーション」と冊子タイトルを変更した。そのときの掲載論文は久野能尚氏の「行動療法入門(1)」、岩橋明子氏の「世界盲人連合(WBU)について」、武内清氏の「京都ライトハウスにおける歩行訓練」、多和田悟氏の「盲導犬を育てる」、芝田裕一氏の「医療関係者視覚障害リハビリテーション研修会報告」、平成3年度視覚障害関係学会・研究会等発表題目一覧(下)となっており、視覚リハビリテーションの分野が広まってきたことがうかがえる。タイトルの変遷は日本ライトハウスのホームページに掲載されており、論文は絶版になったものから逐次PDFに変換し、公開することになっている。

視覚障害の研究を発表するための場所はその他に日本弱視教育研究会による「弱視教育」、視覚障害リハビリテーション協会による「視覚リハビリテーション研究」、日本ロービジョン学会による「日本ロービジョン学会誌」などが発刊されてきたが、それらの発表誌は会員のみが手にできるものである。日本ライトハウスは三宅文庫から助成をいただきながら、特に会員に限定することなく有用な記事を掲載してきた。今回79号を発刊するにあたり、「視覚障害リハビリテーション」から「視覚リハビリテーション」へと冊子名を変更することにした。

現在再生医療の分野でES細胞、iPS細胞、STAP細胞など、今まで不可能とされた組織を再生するための基礎的な技術の開発が次々と発表されている。治療として網膜の再生が期待され、視力の回復も夢ではなくなりマスコミ各社

の報道は過熱している。報道を見た人たちは視力が完全に回復すると思っているが、臨床現場における認識は随分と違ったものである。治療技術が確立しても視力が完全に再現されるのではなく、見え方に変化が生じることが分かっており、そこから視覚リハビリテーションの必要性が唱えられている。リハビリテーションという用語は医療現場では整形外科にしか見られなかったものが、眼科外来に近い将来登場することになる。現在、少しずつではあるが、ロービジョン外来として診療科が設立されつつあり、ロービジョンケア、ロービジョンリハビリテーション、眼科リハビリテーション、視覚リハビリテーションなどの用語が使われている。そこでは障害を特に論じているわけではない。

4月に国際ロービジョン学会(VISION2014)がオーストラリア、メルボルンで開催された。国際ロービジョン学会は3年に1回開催されるロービジョンケアに携わる様々な職種が一度に集う学際的な集まりである。その内容は網膜移植などの最先端の医学から、視覚リハビリテーションの方法、症例報告、地域における取組の方法など多岐に渡る。そのなかでもロービジョンケアの中心的な役割を担っているのは世界的に見るとオプトメトリストである。オプトメトリストの養成を行っている国は欧米ではアメリカ・カナダ・イギリス、アジア、オセアニアではオーストラリア・マレーシア・香港であり、職務内容は光学的な側面からアプローチを行う眼科の専門家で眼鏡、コンタクトレンズの処方を行うことができ、ロービジョンクリニックではロービジョンエイドの処方を行っている。欧米の一般的なロービジョンクリニックはオプトメトリストが眼科的診断を行って光学的な処方を行い、作業療法士(Occupational therapist)が電話のかけ方や水の入れ方などの練習を行い、歩行訓練士が歩行訓練を行い、地域社会へのアプローチはソーシャルワーカーが行うというように分業されている。施設の運用方法はさまざまであり、公営施設、大学が研究施設の一環として運用している場合は、費用は無料となっている。

今後、私たちへの問いかけは視覚障害にとどまらず、もっと一般的な観点で協力を問われるようになることは間違いないと思われる。「視覚リハビリテーション」と改題したことを機に、原著論文も広く募集し、学際的な論議が行われるプラットフォームを提供することが我々の責務と考える。